

国語問題

注意事項

- 1 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 2 問題冊子は全部で18ページである。脱落のあった場合には申し出ること。
- 3 現代システム科学域・法学部・経済学部・商学部・看護学部・生活科学部の受験者は、2ページから14ページまでの第一問・第二問のみ、国語解答用紙(I)に解答すること。
ただし、看護学部・生活科学部の受験者は、出願時に国語を選択した者のみ解答できる。
- 4 文学部の受験者は、2ページから14ページまでの第一問・第二問については、国語解答用紙(I)に、また、15ページから18ページまでの第三問については、国語解答用紙(II)に解答すること。
- 5 解答用紙の所定欄に、受験番号(左右2箇所)、氏名を必ず記入すること。
- 6 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 7 解答以外のことを書いたときは、該当箇所を無効とすることがある。
- 8 問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。
- 9 問題冊子は持ち帰ること。

(余 白)

第一問

次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。(五十点)

天国は魂の安らぎの場所ならば、そこには誰がいるのだろうか。子供のころ、そんなことばかりが気になった。

わたしの魂を絶えず揺さぶったあなたはそこにいるのだろうか。わたしの存在を脅かしたあなたはそこにいるのだろうか。誰がいて、誰がいないのだろうか。わたしが愛したあの共同体、だがあのひとだけがわたしにとって問題であったあなたは、天国にもいるのだろうか。そのあなたがいないあの共同体は、共同体たりえない。だが、あなたがいたらわたしの魂は安らぐことがない。

わたしが愛していないひととは、わたしが愛していないからといって悪いひとではなく、むしろよいひとであって、わたしよりも天国に近かったりする。もしわたしが天国に行けたとして、そのひとに会ってしまったらばどうすればよいのだろうか。魂の安らぎを得たわたしは、愛していないあなたを見て、お久しぶりね、と微笑ほほえむことができるのかもしれない。だがそれはもはやわたしと言えるのだろうか。

「天国に行けたとして、知り合いがいなかったらどうしようというどうでもいい悩みが一つ増えた」

大人になったわたしに、友だちからメッセージが届く。そう、もはや知り合いが誰もいない可能性すらあるのだ。大人になるというのはそういうことだ。ひとりぼっちの天国。それは天国といえるのだろうか。

「地獄とは他人のことだ」ってサルトル(注)は言うけど、その逆だ」

友だちが言う。他人がいる地獄。ひとりぼっちの天国。

どちらがより天国に近いのだろうか。

悩みはつづく。わたしはカップヌードルのトムヤムクン味が大好きなのだが、これは天国にもあるのだろうか。なかったらどうしよう。だが、不健康なイメージかつきわめて俗的なニュアンスのあるカップラーメンは、天国にはなさそうに思える。天国では魂のみの存在になっているため、身体的な欲望に悩まされることはないと述べるひともあるが、美食家や酒好きなどは、天国でどのようにして過ごすのだろうか。暇で暇で仕方がないのではないか。

だいたい、天使と話が合うのかも心配だ。なぜだかわからないが、天使は埒が明かないイメージがある。デリカシーもなさそう。わたしが気にしていることを、あっけらかんと悪意なく伝えられてしまったらどうしたらいいのだろうか。そもそもコミュニケーションが可能なのだろうか。時には天使に恋をしてもいいのだろうか。恋をして失恋してしまったら、そこは本当に天国なのだろうか。

立ち止まって考えてみると、もちろん諸々と齟齬そごが出てくるような世界観に惹かれる。あまり作り込まれていない設定の漫画や、映画によく見られる。そしてそれはほとんどの場合、不十分さとして落胆されがちだ。

航空会社スターフライヤーの飛行機を利用したときのことだ。硬い椅子に身を沈めていると、目の前の画面で、飛行機の安全についてのビデオが流れはじめた。飛行機に乗るときはいつも緊張する。だからわたしは、ビデオは真面目に見るようにしている。だが、まわりのひとなちはみな眠りこけたり、本を読んだりして、気にもとめていないようだった。

動画を見ると、快適な空の旅とお客様の安全を守るべく誕生したという「スターフライヤーマン」が出てきた。見た目はアイアンマンのようで、機体と同じであるアルミ合金のボディをしているのが特徴だという。スターフライヤーマンは丁寧なしぐさでわたしたちに、空のルールについて解説してくれる。わたしはそれを集中して見ることにする。隣のおじさんは、すうすうと息をたてて眠っている。

四分ほどの動画が終わりに近づく。座席前のポケットに安全のしおりが入っていることが示唆されはじめたら、だいたいの場合終わりに近づくのだ。わたしがほっと息をつこうとしたとき、スターフライヤーマンがわたしに向かって言った。

「ご質問がありましたら、私スターフライヤーマン、または客室乗務員にいつでもお尋ねください」

わたしは胸を打たれる。いや、スターフライヤーマンには訊けない、と思う。スターフライヤーマンが存在する動画の世界観と、わたしが生きるこの社会は決して交わらないからである。「自分は次の便の説明で忙しいから、ここで失礼する」とか「自分の信頼する客室乗務員にお尋ねください」などいくらでも言うことはできたはずだ。だが、スターフライヤーマンは「私、または客室乗務員に」と言った。^①その恣意性、もしくは不完全さ。興奮して調べてみると、スターフライヤーマンは、飛行機の化身だという。だが同時に空の「守護神」でもあるらしい。見た目はきわめてヒーローのようだが、飛行機の化身でもあり、神でもあるという、その設定の複層性。

たとえばこれは「そういうことにする」「その設定にこちらが乗っかる」ことについての話ではない。何かのキャラクターが、観客や画面の外の視聴者に声援を呼びかけ「そのおかげで元気が出た」「声援のおかげで回復した」「また敵と戦える」などといった復活する姿を見せることは、よくあることだ。これはひとつの「約束ごと」であり「本当に声援だけで力が出ることはあるのか」「画面を隔てているのに声援が聞こえるのか」などと真剣に思い悩むことはない。「そういうものだから」と互いに前提しながら行われる交流である。

一方で、スターフライヤーマンや天国などは、そうした約束事をそもそも取り結ぼうとしていない。何かしらの世界を構築しようとして試みている。しかしそれをこちらの世界にいるわたしたちが生きようとする、きっちり閉じられていたはずの世界に割れ目が生じる。

だが、その割れ目は本当に、ただ落胆の形で受け止めていいのだろうか。

ファンタジーものがあまり好きではなかった。魔法の世界も、妖精の国も、わたしには魅力的ではなかった。とりわけ、世界観が確立されており、設定の強度が高ければ高いほど、わたしの心は浮き上がらなかった。

(注三) ハリー・ポッターが見せる世界はすばらしかったが、わたしの家のポストには決して魔法学校の入学を許可する手紙は届かないと思った。わたしの部屋のクローゼットを開いても、ナルニア国にはつながっていないと思った。

作り込まれた世界観は、わたしと交わることができない。わたしがそれを生きることができない。それほどまでに、その世界は強固で、完璧である。

それに対して、天国やスターフライヤーマンが見せる世界は、不完全であるがゆえに、わたしと交わることができる。閉じられていると思いきや、②天国やスターフライヤーマンが見せる世界は、不完全であるがゆえに、わたしと交わることができる。

あるいは、衝突に立ち会うことができる。あちらの世界と、こちらの世界が交差する。ぶつかる。矛盾が生じる。だが、この衝突は静かで密やかだから、なかなか気がつくことができない。ようやくとらえたとしても、ただの矛盾であると笑い飛ばしてしまえば、ひどくつまらないものになるだろう。

いやむしろ、こちら側の論理がばかばかしく思えることもある。天国は魂の安らぎの場所であるという定義は誰が決めたのか。スターフライヤーマンに訊けないのは本当なのか。

浦島太郎がウミガメに乗って龍宮城に行くことについて「目や耳に水が入らなかったか」とたずねる子どもについて寺山修司が書いていた。たしかに、どのようにして龍宮城へ行ったのだろう。一分ほどで着く経路だったのだろうか。勢いはどうだったのか。

しかし、そんなことを心配するのはこちら側の論理である。しかし、こちら側の論理と、あちら側の論理が衝突するからこそ、わたしたちは互いに交わることができる。「浦島太郎は特殊なマスクをしていた」「酸素ボンベを持っていた」などの設定が加わってしまったら、それはわたしが関わることでできない、閉じられた世界になってしまいうだろう。

あちらの世界がこちらの世界と衝突することにより、世界に奥行きが生まれる。ここがおしまいではない、その可能性が生まれる。スターフライヤーマンが飛行機の化身でありながら空の守護神であるという世界がありうるといふことの、希望が生まれる。思うにいちばん苦しいのは「行き止まり」である。もしくは「なんだこんなもんか」である。もうそれ以上、掘り下げることが

ない状況。可能性がない状態。

そしてそれは他者関係においても同じである。「こいつ、こんなもんか」と思ったり、思われたりしたとき、わたしとあなたの間の生き生きとしたものは終わる。他者の他者性が失われたとき、その関係性は閉じたものとなる。

サルトルが戯曲『出口なし』で描いた他者関係とはまさにそのようなものだ。「地獄とは他人のことだ」。戯曲に出てくる三人は、互いにまなざしを向け合い、告発しあう。お前はこのような人間であると暴き、断定し合う。たしかにそれは地獄である。

だがそうでない他者関係もある。他者が他者であることが、おそろしくも喜ばしいことがある。息が詰まり、おびえ、揺さぶられながらも、あなたが他者であり、無限の奥行きがあるということが、わたしの心を離さないことがある。

生きているだれの喉仏もこわい 触れると蒼い火が見えそうで

(大森静佳)

あなたの喉仏がこわい。あなたが身体をもち、喉仏をもっているということがおそろしい。生きているということが、どうしようもなく感じられる。触れようとすれば、ただの身体の一部である喉仏から、あなたという存在の途方もない奥行きを予感させる。それに、見えるものはあなたの別の側面にとどまらない。「蒼い火」といった、何かこちらの世界を超えた、わたしが想定している論理を超越した何かが見える。見えてしまう。そこから目を離すことができない。

そんなあなたといることで、またさらなる世界の奥行きを感じることもできる。まだここが終わりじゃないことを信じられる瞬間がある。

抱きしめれば 水の中のガラスの中の気泡の中の熱い風

(穂村弘)

冷たい水の中にあるガラスの中にあるわずかな気泡、そしてその中にどっと吹いている熱い、熱い風。世界の位相が深まっている。こちらの論理を超えて、奥へ、奥へと進んでいく。その先にあるのは、肌に吹き付ける息苦しいほどの、目が醒めるような熱

い風である。なにも完璧ではない、謎に満ちた世界。だがそれゆえに、わたしはその世界に関わることができる。衝突することができる。

奥行きを持つあなたを、同じように奥行きを持つわたしが抱きしめれば、世界に裂け目が生まれる。行き止まりかと思えた看板に亀裂が入り、がらがらと崩れて、その奥へと引き込まれていく。そこに入ることができる。

天国もスターフライヤーマンが飛び回る天空も海の底にかがやく龍宮城も、ここからはずっとずっと遠い。それでも、わたしはそこに関係することができる。その裂け目がわたしを呼び寄せている。もしくは、同じように裂け目を持つ他者が誘っている。それがとてもうれしい。

④ 中国も天国もここからはまだ遠いから船に乗らなくてね

(正岡豊)

(永井玲衣『世界の適切な保存』(講談社、二〇二四年)より。一部表記等を変更した。)

〔注〕 (一) サルトル——フランスの哲学者・作家。一九〇五〜一九八〇年。

(二) アイアンマン——アメリカのコミックとそれを原作とする映画シリーズのヒーロー。超人的能力が得られるパワードスーツを装着して戦う。

(三) ハリー・ポッター——イギリスの作家J・K・ローリングによるファンタジー小説シリーズ。主人公は、入学許可の知らせを受けて魔法使いを養成する魔法学校に入学する。

(四) ナルニア国——イギリスの作家C・S・ルイスによるファンタジー小説シリーズ「ナルニア国物語」における架空の国。子どもたちは部屋にあるクローゼットを通じてナルニア国に行く。

(五) 寺山修司——歌人、詩人、劇作家。一九三五〜一九八三年。

(六) 『出口なし』——サルトルの戯曲。一九四四年初演。男女三人がホテルの一室に閉じ込められた状況で進行する会話劇。

〈設問〉

問一 傍線部①について、スターフライヤーマンの発言の「恣意性、もしくは不完全さ」とはどういうことを指すのか、わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部②「天国やスターフライヤーマンが見せる世界は、不完全であるがゆえに、わたしと交わることができる」とはどういうことか、「ハリー・ポッター」「ナルニア国」の例と比較しながらわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部③「他者の他者性が失われたとき、その関係性は閉じたものとなる」とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部④について、この短歌を本文全体の趣旨をふまえて解釈することを前提に、次の(1)(2)にそれぞれ解答せよ。

(1) 「中国」「天国」は、どのような世界を表しているか、わかりやすく説明せよ。

(2) 「船に乗」とは、どのような行為の比喩であるか、わかりやすく説明せよ。

第二問

次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。なお、この文章は一九六六年に発表されたものである。(五十点)

ヘロドトスの『歴史』第五卷(九七節)に、アテナイがイオニアの叛乱(はんらん)を助けるために二十隻の船を派遣したということが記されているが、それについて

「しかしこれらの船がギリシア人にとっても、またペルシア方の人たちにとっても、もろもろの不幸(悪)のはじめとなったのである」

という短かい言葉がつけ加えられている。事実、アテナイがこの二十隻の船を送って、イオニアのギリシア人都市を応援したことがもとになって、ペルシア王はアテナイをこらしめるための軍をおこすことになるのであり、これがペルシア戦争へと発展し、ギリシアとペルシアの両方に多数の死傷者を出すことになったのである。この大遠征に伴う沿道住民の難儀や、都市農村の破壊や荒廃など、いろいろの不幸がそこから結果したのである。だから、ヘロドトスのこの説明は適切であると言わなければならない。しかしこれによってヘロドトスは、ペルシア戦争を罪悪であるとして否定したわけではない。もし否定していたのなら、この戦争で「ギリシア人やギリシア人以外の人たちによって行なわれた驚異すべき大事業が、その栄光を失ってしまうことのないように」これを書き留めておくという、かれの『歴史』も書かれ得なかったはずである。

またヘロドトスは、後にプルタルコスが誤解したように、アテナイ人の戦争責任を追及し、これを断罪しようとするのでもない。むしろかれはアテナイのために、

「もしアテナイ人が迫り来る危険に恐れをなして、自分の国をすてて逃げ出すか、あるいはすて去らずに、自国にとどまるにしても、ペルシア王クセルクセスに降参するとしたら、海上においてペルシア王に敵対しようとする国は一つもなかったろう。(中略)しかし現実には、アテナイがギリシアを救ったのであると言っても、真相を間違えたことにはならないだろう。なぜなら、事態はかれらアテナイ人の向背^①によって、どちらへでも傾く形勢になっていたからである。しかしかれらはギリシアが自由の国として残る方を選んだのであり、まだペルシアの勢力下に入っていない残余のギリシア人すべてを奮起させ、神

明の加護によって、ペルシア王を撃退したのは、まさにかれらだったのである。デルポイからもたらされた神託は恐ろしいものであって、かれらを恐怖におとしめたのだけでも、それにもかかわらず、かれらを翻意⑦させ、ギリシアを見すてさせることにはならず、かれらはいくまでも踏みとどまり、侵入者を迎え撃って一步も退こうとはしなかったのである」(七卷一三九節)

という言葉で、その特別の功績をたたえている。だから、かれはあの短かい説明で、アテナイがイオニアの叛乱に際して送った二十隻の船と、後の事件との間の不幸な因果をのべているだけのことで、アテナイの戦争責任を追及しているのではないと言わなければならぬ。

ホメロスの『イリアス』(五卷五九以下)にも、メリオネスに討ち取られるペレクロスのことで、かれはアレクサンドロス(パリス)のために船をつくったが、この船こそすべてのトロイア人と、かれ自身にとっての不幸(悪)のもとになるものであったと語られている。しかしその意味は、むしろすぐ知られるように、アレクサンドロス(パリス)が船でスパルタへ行き、メネラオスの妻ヘレネを誘惑したのが、トロイア戦争のおこりであるということなのである。これは不幸な因果であるが、船をつくったペレクロスにトロイア戦争の全責任を負わせるような話ではないのである。その不幸は、またかれ自身の不幸なのであって、かれはこの戦争で死なねばならなかったのである。

トロイア戦争にしてもペルシア戦争にしても、戦争は不幸なことであり、悪である。これを避けるためには、アテナイは水と土をペルシア王に献じて、すぐに降参すればよかったかも知れない。しかしかれらはギリシアの自由を死守することを選んだのである。それはかれらの罪であろうか。戦争は悪であり、不幸である。これはかれらの認識でもあった。しかしかれらは侵略者と戦い、自由のために戦うことを不正であり、罪であるとは信じなかったであろう。むしろその戦争を正義であると信じたであろう。つまり戦争において、善悪の区別と正邪の区別とは一致せず、むしろ分裂しなければならぬのである。そして人生には、通俗の幸福、利益をなげうつことを決心させるもの、苦難の生涯を選ばせるものがあるということは、ヘラクレス(注三)の難業などに見られるところであって、ギリシア人もいわゆる英雄の生涯において、これを認めなければならなかったのである。そして歴史は、国民が時には英雄的であり得ることを示しているのである。

しかしながら、正邪の問題はまことにやっかいな問題なのであって、実人生においても裁判に訴えたり、神の告示をアオイダ^aり、あるいは力づくの勝負できめるほかはなくて、充分納得のいく解決などというものは、なかなか出来ないのである。ギリシアのソフィストの時代以来、正邪と美醜（みよいこと、みっともないこと）は、名目だけのこと、人間同士の約束ごととしてのみ存在するものであって、実体はないのではないかと疑われて来ている。つまり時代により社会によって、リョウフウ美俗とするところのもの、正しさとされるころのものが異なるということが、地理と歴史の知識が多くなるに従って、一般に知られるようになったからである。それは法律や風俗習慣の相対性として、今日の常識でもある。

しかしながら、^③正邪や美醜が時と所によって異なるということは、われわれがそれらなしに生きていくことができるということの意味するものではない。もしわれわれが正邪の区別を全く忘れてしまうことができるなら、最大の不幸である戦争をふくめて、すべての争いごとは人間界から姿を消していたかも知れない。しかしわれわれの自己主張は、いつも自己の正義を主張するものであり、われわれの不和は、みっともないと思われたり、不正なことをしていると想ったりすることにもとづくものが大部分なのである。これはわれわれがいろいろな習慣や掟^{おきて}、あるいは戒律、規則、礼法などを何らかの形でよりどころにしていること、つまり知らず識^しらずのうち何らかの法秩序の下にあることを示すものとも解されるだろう。いわゆる無法者が、かえって仲間同士のよ^りきびしい掟の下に生きなければならなかったりするものである。

ギリシアの詩人は「ノモス」（法と習）が神々と人びとの王であるとうたったけれども、われわれの生活を律するいろいろな定めは、われわれの歴史よりも古く、われわれの国家社会もそのうちから生まれ、その上に成り立っていると云わなければならないだろう。したがって、法律や習慣の定めるところのものが、いかに時と所によって異なるとしても、そのような相対性から、それが全くの無であるとするのは、早急の推論と言わなければならないだろう。人間のことはすべてが相対的で、絶対的な意味はないと言ってよい。しかし相対性の故にすべてを否定するとしたら、まず人間を否定しなければならないだろう。

ところで、戦争を罪惡とし、そこに犯罪を見出^い出して、告発しようとするのは、いかなる正義であり、法なのであろうか。法や正義は人間の相対性の見本として、むかしから^{（注三）}プロタゴラス主義者が、手ごろの攻撃目標として、絶えず批判を加えて来たところのものである。だから、戦争を絶対の罪惡とする論告は、案外むずかしいと言わなければならない。戦争が病氣や貧乏などと共に、

われわれの不幸であるということは、すでに見られた意味において、比較的簡単に認められるであろう。そしてすべて不幸をもたらすものを、悪であると共に、また不正であり、罪であるとすることも、そこから比較的簡単に認められるかも知れない。(中略)そして不幸をもたらす戦争に罪ありと宣告してもよいのである。しかし戦争を罰するとは、どういうことなのか。戦争そのものは、台風のように過ぎ去って、その後に多大の惨禍をのこしたのであるが、われわれは戦争そのものを捕えて、罰することはできない。

むかしペルシアの王クセルクセスは、ギリシア遠征のためにヘレスポントス(今日のダーダネルス海峡)に架橋を命じたのであるが、工事なかばに暴風雨が襲って、これを破壊してしまった。怒ったクセルクセスは、その海峡に三百のむち打ちの刑をかし、また一对の足がせを投入させ、烙印師をつかわして烙印させたとも言われている。しかし暴風雨を罰することはできなかったのである。われわれも戦争そのものに有罪の判決を下したところで、これを罰することはできず、せいぜいクセルクセスの真似をして、戦争呪詛、戦争反対の儀式を行なうくらいのところであろう。しかし戦争の惨禍に対して、何らかの補償が行なわれなければ、正義は回復されないことになるだろう。

クセルクセスは架橋の工事監督たちの首をはねさせたと言われるが、果してそれが当たっているかどうか全く疑問だけれども、やはり罪は誰か人間の上に落ちてくると考えなければならぬ。戦争の場合には、最も簡単な正義の論理が支配するのである。すなわち罪はすべて敵が負うべきものである。戦争は不幸であり、悪であるが、これらの責任はすべて敵の不正にあるということである。かれらが敵の住居を破砕しつくし、男をみな殺しにし、女を奴隷にするのは、この単純な正義の論理によるのであって、戦争の不幸はこれによって償われ、正義は回復されるのである。これは今日の世界においても、形を変えて依然として行なわれている論理なのだとも考えられる。内戦も一つの戦争であるが、その残酷さは古来いくつも例のあることが知られている。

内戦が不幸であり、悪であることは、外戦と少しも異なるところはない。しかしすべての罪は賊軍に帰せられ、かれらは国賊あるいは人民の敵として、非道の罰を受けねばならないのである。それが内乱や革命の正義なのである。しかしながら、このような仕方で罪は裁かれ、罰が行なわれ、正義が回復されるのだとすると、戦争の罪悪をどれだけ言ってみただけで、戦争はそれららの手で刑罰をも完了するのであるから、戦争そのものは少しも損われることなく、いわば永遠に生きつづけることになるだろう。

戦争は悪であり、不幸である。しかしそこに罪と罰を求め、正義を実現させようとするなら、ただ戦争するよりほかはないという
ような論理になるだろう。戦争はそれ自体で完結し、外からの批評を受けいれないのである。

したがって、戦争批判の立場は、ただ戦争の悲惨を訴え、戦争の罪を鳴らすだけでは、まだ充分な理由をもっていないこと
となる。戦争批判は戦争が、それ自体で解決をつけてしまうことを否定し、戦争に介入できる立場を獲得しなければならぬ。
それは戦争が戦争によって解決されるという、戦争の正義を否定して、もっと別の正義を示さなければならぬ。という、何か
むずかしそうであるが、現在の国連が紛争の平和的解決のために行なっている活動には、そのような立場が予想されているとも考
えられる。

現在われわれが住んでいる社会では、あだ討ちや果し合いは許されない。個人や党派が相対立する正義の主張を、直接このよう
な手段で貫こうとすることは、かえって不正であり、犯罪であるとして罰せられるだろう。国家はそのような争いに介入して、自
己の法廷において、その裁きをつけることを、一つの重要な役目としていえることができるだろう。そして世界政府や世界国
家が、今日の世界間の争いについても、全く同じ役目を果たすことができるようになるなら、戦争は全くの不法となり、禁止される
だろう。国連の仕事は、その先駆としての意味をもつと考えられるだろう。ただ今日までのところでは、国連のそのような活動
は充分強力ではなく、戦争の正義に代わる法秩序の確立も、前途①なお遼遠りょうえんであると言わなければならぬだろう。

〔田中美知太郎「道徳問題としての戦争と平和」(『田中美知太郎全集第十巻』
筑摩書房、一九八八年増補版)より。一部を省略し、表記等を変更した。〕

〔注〕 (一) アテナイ——古代ギリシアの地名、都市国家名。以下、本文に登場する固有名詞は、いずれも、古代ギリシア時代ま

たは古代ギリシア神話における地名、国家名、人名である。

(二) ヘラクレスの難業——古代ギリシア神話において、英雄ヘラクレスは、自らの罪を償うために、怪物退治など十二の
難業を果たし、その後も、数々の遠征や戦闘に生涯を捧げた。

(三) プロタゴラス主義者——真理の基準は個々の人間の感覚や判断にのみあるという相対論を主張した、古代ギリシアの哲学者プロタゴラスの思想に従う者。

〈設問〉

問一 傍線部④から⑥のカタカナを漢字で記せ（楷書で正確に書くこと）。

問二 傍線部⑦⑧について、「翻意する」、「前途遠遠りようえん」という語句はそれぞれどういう意味か、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部①「アテナイ人の向背」とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部②について、戦争において「善悪の区別」と「正邪の区別」が一致しないのはなぜか、わかりやすく説明せよ。

問五 傍線部③について、「正邪や美醜が時と所によって異なる」ことが「われわれがそれらなしに生きていくことができる」ということを意味するものではない」と言えるのはなぜか、わかりやすく説明せよ。

問六 傍線部④について、「戦争はそれ自体で完結」すると言えるのはなぜか、わかりやすく説明せよ。

第三問

次の(A)・(B)の問題にそれぞれ解答せよ。(百点)

(A) 次の文章は『平治物語』の一節である。平治の乱に敗れた源義朝の寵愛を受けた女性、常葉には幼い三人の男の子がいた。子どもたちの身に危険が迫っているのを察した常葉は、三人を連れて都を逃れようとする。途中、清水寺に参り、本尊の観音に子どもたちの無事を祈願した後、さらに逃避行をつづけ、伏見の里に着いたところから本文は始まる。よく読んで、後の設問に答えよ。

日暮れ、夜に入れども、立ち寄るべき方も覚えぬ。山の陰、野のほとりに人の家は見ゆれども、「あれも敵のあたりにやあるらむ。これも六波羅の家人などの所にやあるらむ」と思へば、心安く宿借りぬべき思ひもなし。「憂かりける人の子どもが母となりて、今日①はかかる嘆きにあふことよ」と思ひけるが、また思ひ返して思ふやう、「愚かなる心かな、かやうに迷ひ出でてしづかならねば、後世をこそ甲はざらめ、ともに契ればこそ子どもあれ。ひとりが咎になしけることのはかなさよ。今日ひめもすに歩み疲れたる者どもに、足をも休めずは、いかにしてか明日の道をも歩ますべき。宿をも借らずは、必ず野山にこそ泊まらむずれ。いさよ、野山にも恐ろしきもの多かんなる。おだしく明かさんことも難し」と思ふも悲しければ、道のほとりのおどろが下に、親子四人の者ども、手を取り組み、身に身を添へて泣きゐたり。

たそかれ時も過ぎぬれば、行き交ふ人も跡絶えて、所どころに見えし家も、とほそを閉ぢて心細し。里の煙も絶えぬれば、宿借らばやのあらまだにも今はなし。夜も更け行けば、風荒く雪降りて、子どもも我が身も、明日を待つべき命とも覚えぬ。「あはれ、人品も見知らざらむ山里人の草の庵もがな。今宵ばかり身をも隠して、子どもを助けむ」と思ひゐたる。

幼き者どもも泣き弱りて、声も時々絶え、息も絶え入るやうに聞こゆれば、「かくても助からはこそあらめ、とてもながらふ

まじき身なれば、人里に宿を借りてこそ、もしやの頼みもあらむずれ」と思ひなして、たく火のかげの見えけるを頼みて、おぼづ近づきて竹の網戸を打ちたたたく。あるじと思しくて、おとなしき女、戸を開けてぞ出でたりける。常葉を見て、よに怪しげにうちまもり、「いかにや、かひがひしき人をも召し具さで、幼き人々を具しまぬらせて、この雪にいづくへとおはしますぞ」と申せば、常葉、「さればこそ。夫の憂き心を見せしかば、うらめしさのあまりに子どもを引き具して出でたれども、雪さへ降りて道を踏み違へてよ」とて、しほしほとしたる気色にて、心ばかりはまぎらかさむと、思はぬよしをすれども、涙は袖にあまりけり。

あるじ、「さればこそ怪しかりつるが。いかさまにも、ただ人にてはおはしませじ。かかる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。ゆくへも知らぬ君の御故に、老い衰へたる下臈が六波羅へ召し出だされて、繩をもつき、恥をもみて、命を失ふほどの目にあふとて、追ひ出だしたてまつるべきかは。この里のならひ、誰か受け取りまぬらせむ。ここをかなふまじと申すならば、野山にこそおはしまさむすらめ。これほど寒く耐へがたきに、明日までも、いかでかながらへさせ給ふべき。家こそ多けれ、門こそあまたあれ、思し召し寄る御ことも、この世ならぬ御契りにてぞさぶらふらむ。見苦しけれども、入らせ給へ」とて、急ぎ呼び入れたてまつる。新しき筵、取り出だして敷かせたてまつり、たき火して当て、饗応してぞ勧めける。

常葉は、胸ふさがりて少しも見ず、子どもをば、とかくすかして食はせけり。常葉が物食はぬを、あるじ心苦しく思ひ、いろいろのくだもの取り出だして、「これはいかに。あれはや」と勧めれば、ただ事とも覚え、ひとへに清水の観音の御憐れみなりと、行く末も頼もしくぞ思ひける。

〔『平治物語』より〕

〔注〕 (一) 六波羅の家人——平氏に仕える武士。京都の六波羅には、平治の乱で勝者となった平清盛以下、平氏一門の居宅が並んでいた。

- (一) かやうに迷ひ出でてしづかならねば——このようにあてどもなく家を出て、落ち着かないありさまなので。
- (二) 後世——今は亡き夫、源義朝の来世。
- (三) いさとよ——さあ、そうすると。
- (四) おどろ——草木が生い茂っているところ。
- (五) とぼそ——とびら。
- (六) 人品——人の身分。
- (七) 竹の網戸——竹を編んで作った粗末な戸。

〈設問〉

- 問一 傍線部㉑から㉒を現代語訳せよ。
- 問二 傍線部①「かかる嘆き」とは、どのような「嘆き」をいうか、わかりやすく説明せよ。
- 問三 傍線部②「助からはこそあらめ」をわかりやすく現代語訳せよ。
- 問四 傍線部③について、常葉は相手に本心を悟られまいと、自分の身の上に関してどのような事情を語っているか、わかりやすく説明せよ。
- 問五 傍線部㉓「ゆくへも知らぬ君」、㉔「老い衰へたる下臈」は、それぞれ誰を指すか、本文中の語で答えよ。
- 問六 傍線部④「ここをかなふまじ」とは、どういう意味か、わかりやすく説明せよ。
- 問七 傍線部⑤「この世ならぬ御契り」とは、どういう意味か、わかりやすく説明せよ。
- 問八 傍線部⑥について、常葉はどのようなことに対して「ただ事とも覚えず」と感じたのか、わかりやすく説明せよ。

(B) 次の文章は、学問を修める者たちの、昔の賢人や聖人の言に対する態度について述べたものである。よく読んで、後の設問に答えよ。設問の都合上、本文内の訓点や送り仮名を省略したところがある。

世儒学者、好信師而是古、以為、賢聖所言皆無非。專精講習、不知難問。夫賢聖下筆造文、用意詳審、^①尚未可謂尽得美。況倉卒吐言、安能皆是。不能皆是、時人不知難。或是、而意沈難見、時人不知。案賢聖之言、上下多相違、其文、前後多相伐者。^③世之学者、不能知也。

(『論衡』より)

(注) (一) 講習——指導を受け、学問や技術を習って。

(二) 用意——心をつかうこと。注意すること。

(三) 倉卒——にわかに。慌ただしく。

(四) 意沈——真意が隠れている。

(五) 伐——矛盾する。

〈設問〉

問一 傍線部①「尚未可謂尽得美」をわかりやすく現代語訳せよ。

問二 傍線部②「安能皆是」を書き下し文にせよ。

問三 傍線部③について、「世之学者」は何に気づいていないというのか、わかりやすく説明せよ。

問四 全文を通して、筆者は「世儒学者」「世之学者」に何を望んでいるのか、わかりやすく説明せよ。